

魏紀四 起重光大淵獻，盡闕逢攝提格，凡四年。

■魏、**吳**、**蜀**、続国訳漢文大成。経子史部 第 4 卷 282p

烈祖明皇帝中之上太和五年（辛亥，231年）

吳 **〔潘濬・潘濬を五溪蠻討伐派遣〕** 春，二月，吳主は太常の**潘濬**に節を假し，呂岱と諸軍五萬人を督して五溪蠻を討た使む。濬の姨（ここは妻の姉妹）の兄の**蔣琬**は**諸葛亮**の長史為り，武陵太守の**衛旌**は奏す，「濬は密使を遣わし琬と相い聞し，自ら託する之計有らんと欲す。」

吳主は曰く、

「**承明**（潘濬の字）は之を為さざる也。」

即ち旌の表を封じて以て濬に示し，而して旌を召して還し，免官す。

吳 **〔宣洲遠征の失敗〕** 衛温、諸葛直の軍行は歳を経て（前卷前年に派遣），士卒は疾疫して死者は什に八九，宣洲は絶遠にして，卒に至るを得る可からず，夷洲の數千人を得て還る。温、直は功無きに坐して，誅せらる。

【諸葛亮と司馬懿の祁山上邽の激突】

蜀 ■ **〔諸葛亮は祁山包囲、司馬懿ら出陣〕** 漢の丞相の亮は李嚴に命じて中都護（左右中あり）を以て府事（漢中の留府の事）を署せしむ。（4-283p）嚴は名を平と更める。亮は諸軍を帥いて入寇し，祁山を圍み，木牛（兵糧運搬車）を以て運ぶ。是に於いて大司馬の曹真は疾有り，帝は司馬懿に命じて西に長安に屯し，將軍の張郃、費曜、戴陵、郭淮等を督して以て之を禦がしむ。

■三月，邵陵元侯の曹真是卒す。

■十月より雨ふらず，是の月に至る。

■**蜀** **〔司馬懿は諸葛亮を上邽でいなす〕** 司馬懿は費曜、戴陵をして精兵四千を留めて上邽（甘肅省渭川道天水県、現・天水市秦州区、清水県）を守ら使め，餘衆は悉く出でて，西に祁山を救う。張郃は兵を分けて雍（扶風郡、甘肅省關中道馮翊県、現・渭南市・西安市）、郿（扶風郡、陝西省關中道郿県、現・宝鸡市眉県）に駐まらんと欲し，懿は曰く、

「料るに前軍能く獨り之に當たる者は，將軍の言は是也。若し當たる能わざれば而も分けて前後と為し，此れ楚之三軍は黥布の禽と為る（12 卷漢高帝 11 年にあり、司馬懿は諸葛亮に才能で劣ると自覺）所以也。」

遂に進み。亮は兵を分けて留めて祁山を攻め，自ら懿を上邽に逆える。郭淮、費曜等は亮を徹え，亮は之を破り，因りて大いに其の麥を芟刈し，懿と上邽之東に遇う。懿は軍を斂めて險に依り，兵は交えるを得ず，亮は引いて還る。

■**蜀** **〔司馬懿は追撃戦に失敗〕** 懿等は亮の後に尋いで（追撃して）鹵城（甘肅省渭川道天水県と伏羌県の間、現・天水市秦州区と甘谷県）に至る。張郃は曰く、

「彼は遠く來たりて我を逆え，戦いを請いて得ず，謂うに我が利は戦わざるに在り，長計を以て之を制せんと欲す也。且つ祁山は大軍の已に近くに在るを知り，人情は自ら固く，止まりて此に屯し，分けて奇兵を為して，其の後に以て之を攻めんと欲す可し，宜しく進前し而して敢えて逼らず，坐して民望を失うべから

ざる也。今亮は孤軍にして食は少なく、亦た行々去らん矣。」

懿は従わず、故に亮に尋ぐ。既に至り、又た山に登り營を掘り、肯えて戦わず。賈詡、魏平は數々戦うを請い、因りて曰く、

「公は蜀を畏れること虎の如し、天下の笑いは奈何！」

懿は之を病む。諸將は咸な戦うを請う。夏，五月，辛巳（17-7+1=1 1 日），懿は乃ち張郃をして無當（蜀郡の無敵軍の名）の監の何平を南圍（祁山の南を囲む蜀兵）に攻め使め、自ら中道を案（據）じて亮に向う。亮は魏延、高翔、吳班をして逆え戦わ使め、魏兵は大敗し、漢人は甲著三千を獲り、懿は還りて營を保つ。

■蜀「追撃の張郃は戦死」六月，亮は糧が盡きるを以て軍を退け、司馬懿は張郃を遣わして之を追わしめ、郃は曰く、

「軍法は、城を圍めば必ず出る路を開く、歸軍を追う勿かれ。」

懿は聽かず。郃は已むを得ず、遂に進む（《魏志・張郃傳》注引《魏略》にて補う）。郃は進みて木門（甘肅省渭川道天水県、現・天水市）に至り、亮と戦い、蜀（ここは司馬光は漢と改めず、本来は漢）人は高きに乗り伏を佈き、弓弩は亂髮し、飛矢は郃の右膝に中たり而して卒す。

■秋，七月，乙酉（21-5+1=1 7 日），皇子の殷は生まれ、大赦す。

■「曹植の諸王親近の上疏」黄初以來，諸侯王の法禁は嚴切なり。吏察之急は（章注により補う），親姻に至るも皆な敢えて相い通問せず。東阿王の植（曹植）は上疏して曰く、

「堯之教え（堯は九族を親しみ、九族既に睦ましくして、百姓を平章にし、百姓昭明にして萬邦を協和す）を為すや、親しきを先にし疏きを後にし、近きより遠きに及ばず。周の文王は寡妻（嫡妻）に刑（法）し、兄弟に至り、以て家邦を御す（詩の大雅思齊の辭。文王は禮法を以てその妻を接待し宗族に至り、これを以て又よく政治を家邦に為せる）。（4-284p）伏して惟うに陛下は帝唐（堯帝）の欽明之徳を資とし、文王の翼翼（慎重なさ）之仁を體し、恵みは椒房（皇后の御所）に洽く、恩は九族に昭かに、群后百寮は、番に休み遞に上り（百寮の宿衛は交代で休息し上直す）、執政は公朝を廢せず、下情は私室に展（続による、展示?）べるを得、親姻（続による、親理?）之路通じ、慶吊（続は慶弔）之情を展べ、誠に己を恕みて人を治め、恵を推し恩を施す者と謂う可き矣。臣に至りて者、人道は緒を絶ち、明時（太平の世）に禁錮せられ、臣は竊に自ら傷む也。敢えて乃ち氣類（万物）に交わり、人事を修め、人倫を敘するを望まざるや。近くは且つ婚媾は通じず、兄弟は乖絶し、吉凶之間は塞がり、慶吊之禮は廢れる。恩紀（恵み）之違いは、路人よりも甚し。隔閡（思想有距離）之異なるは、胡越よりも殊なる。今臣は一切（可否を問わず一切これを整理）之制を以て、永く朝覲（諸侯や属国の主が天子に拝謁すること）之望み無し、心を皇極（天子の位）に注ぎ、情を紫闥（王宮）に結ぶに至りて、神明之を知る矣。然れども天實に之を為す（詩經の邶風北門子篇の語）、之を謂何せん哉！退きて惟うに諸王は常に戚戚として具に爾づく之心（詩經に曰く、戚戚たる兄弟は遠ざかること莫く具に爾づくこと。）有り、願はくは陛下は沛然（雨降り盛ん）として詔を垂れ、諸國の慶問をして、四節（四時の節）に展べるを得、以て骨肉之歡恩を叙べて、怡怡（兄弟和樂の貌。論語に孔子曰く、兄弟は怡怡たり）之篤義を全くせ使むべし。妃妾之家は、膏沐（脂と甘藥の屬）之遺、歳ごとに再び通じるを得、義を貴宗（貴戚及び公卿の家）に齊しくし、恵を百司（百官）に等しくすべし。此くの如くならば、則ち古人之歎ずる所、風雅（詩經の国風・大雅・小雅）之詠ずる所、復た聖世に於いて存せん矣！臣は伏して自ら惟い省みるに、錐刀之用（些少なる用）無し。陛下之拔授する所を觀るに及びては、若し臣を以て異姓と為せば、竊に自ら度を料り、朝士に後れず矣。若し遠遊（諸侯は遠遊冠を被る）を辭し、武弁（三都尉・諸侍中・常侍は皆戴く）を戴き、朱組（諸侯は朱組を帯びる）を解き、青紱（三都尉・諸侍中・常侍は皆佩びる）を佩び、駙馬（都尉）、奉車（都

尉^{すみやか}、趣^すかに一號（功績を立てて一勲号を取る）を得、宅を京室に安んじ、鞭を執り筆を珥^{さしはさ}（耳玉）み、出でては華蓋（乗輿の車上の飾り）に従い、入りては輦轂（天子の車）に侍り、聖問（天子の下問）に承答し、左右に拾遺するを得れば（乃ち諸王の地位を去りて臣列になる事）、乃ち臣が丹誠（まごころ）之至願（ひたすらの願い）、夢想に離れざる者也。遠くは《鹿鳴》（詩經の鹿鳴の篇は群臣嘉賓を宴する也）の君臣之宴（続は義）を慕い、中ごろには《常棣》（詩經の常棣の篇は兄弟を宴する也。その詩に曰く、凡そ今の人は兄弟に如くはなしと。所謂他に非ざるなり。又頰弁の詩に曰く、豈に伊れ異人ならんや、兄弟は他に非ず）の他に匪^{あら}ざる之^{いましめ}誠を詠じ、《伐木》の友生之義を思う（続による、不?、詩經の伐木の篇は朋友故旧を燕する也。その詩に曰く、彼の鳥を相るに、猶ほ友を求める聲あり、矧んや伊れ人にして、友生を求めざらんや）、終わりに《蓼莪》（詩經の篇の名。その詩に曰く、哀哀たる父母、我を生みて劬勞す。これが徳に報いんと欲すれども昊天極まり罔しと）の極まり罔^なき之哀を懷く。四節之會毎に、塊然（孤独の貌）として獨り處り、左右は惟だ僕隸（奴僕）のみ、對する所は惟だ妻子のみ、高談も與に陳べる所無く、精義も與に展べる所無く、（4-285p）未だ嘗て樂を聞きて而して心を拊ち、觴に臨み而して歎息せざればあらざる也。臣は伏して以うに犬馬之誠は人を動かす能わず、人之誠は天を動かす能わざるに譬^{たと}える、城を崩し（烈女傳には、齊の大夫杞梁は呂城に戦死す。その妻は城に向かいて哭す。城はこれが為に崩れると）、霜を隕とす（淮南子に曰く、鄒衍は忠を燕の恵王に盡す。燕の恵王は讒を信じてこれを繋ぐ。鄒衍は天を仰ぎて哭す。正夏なるに天はこれが為に霜を降らすと。誠の天に通じるとの譬え）は、臣は初め之を信じ、臣の心を以て況^{たと}えるに、徒^{いたず}らに虚語なる耳！葵藿（冬葵）之太陽に傾葉（続は傾）するが若き、為に光を回らさずと雖も、然るに之に向う者は誠也。竊に自ら葵藿^{きかく}に比す、天地之施を降し、三光之明を垂れるが若き者は、實に陛下に在り。臣は聞く《文子》（老子の弟子）は曰く、『福の始め為らず、禍いの先に為らず。』今之否隔（塞がり隔たりて通じず）は、友於（兄弟）同じく憂い、而るに臣は獨り倡言する者は、實に聖世に於いて施を蒙らざる之物有るを願わず、陛下の光被時雍（帝堯の九族を睦ましくするの効を言う。堯典に曰く、允に恭しく克く讓り、四表に光被し、萬邦協和し、黎民於變り時雍らぐと）之美を崇び、緝熙（詩の周頌に曰く、維れ清くして緝熙なるは、文王の典と。緝熙は光明なる貌）章明之徳を宣べるを欲する也！」

詔して報じて曰く、

「蓋し教化の由る所は、各々隆敝有り、皆な始に善く而して終りに惡しきに非ざる也、事之をして然ら使む。今諸國の兄弟をして情禮簡怠（簡疎怠慢）し、妃妾之家をして膏沐疏略なら令むも、本は諸國の通問を禁錮する之詔は無き也。枉^{まが}れるを矯め正しきに過ぎ、下吏は譴を懼れ、以て此に至る耳。已に有司に敕するは、王の訴える所の如くせよ。」

■〔同姓優遇の曹植の上疏〕植は復た上疏して曰く、

「昔漢文は代を發せんとし（13 卷漢高后八年にあり）、朝に變有るを疑い、宋昌は曰く、『内に朱虛、東牟之親有り、外に齊、楚、淮南、琅邪有り、此れ則ち磐石之宗なり、願わくは王は疑う勿かれ。』臣は伏して惟うに陛下は遠くは姬文（周の文王。周は姬姓。號仲・號叔は文王の母弟）の二號之援を覽（文王は二號に常に諮問）、中には周成（周の成王）の召（召公、周の同姓）、畢（畢公、周の同姓）之輔けを慮り、下は宋昌の磐石之固きを存じよ。臣は聞く羊質（揚子の言）にして虎皮なるは、草を見れば則ち悦び、豺を見れば則ち戦い、其の皮之虎なるを忘れる也。今將を置くこと良からず、此に似たる有り。故に語りて曰く、『之を為す者は知らず、之を知る者は為すを得ざるを患う也。』昔管、蔡（成王は幼にして管叔・蔡叔の二人は武庚を持って畔く。成王は管叔を誅し蔡叔を放ち周公を持って師と為し、召公を持って保と為す）は放誅せられ、周、召は弼と作る。叔魚は刑に陥り、叔向は國を贊^{たす}ける（左傳にあり。晉の邢侯は雍子と田を争い、久しくして成ぐ無し。韓宣子は叔魚をして舊獄を断ぜしむ。罪は雍子に在り。雍子は其の女を叔魚に納れる。叔魚は罪を邢侯に蔽む。邢侯は怒りて叔魚及び雍子を朝に殺す。宣子は其の罪を叔尚に問う。叔尚を以て其の親に私すと為さずして、これに従って平を決す）。三監（周の武王は叔鮮を晉に、叔度と蔡に、叔處を霍に封じて、殷の遺民を治めし

める)之鬻は、臣は自ら之に當たらん。二南(周公・召公)之輔は、求めば必ず遠からず。華宗貴族籙王之中には、必ず斯の擧に應ずる者有り。(4-286p)夫れ能く天下をして耳を傾け目を注が使むる者は、權に當たる者是れ也。故に謀は能く主を移し、威は能く下を懼れしむ。豪右は執政し、親戚に在らず、權之在る所は、疏しと雖も必ず重く、勢い之去る所は、親しと雖も必ず輕し。蓋し齊を取る者は田族なり、呂宗に非ざる也(太公の姓は呂なり、其の後に田成子に取られる。齊を滅ぼしたのは呂族でない)。晉を分ける者は趙、魏なり、姬姓に非ざる也(唐叔は姬姓にして其の後、趙籍・魏斯・韓虔に取られる。異姓に分割せられしなり。同姓を重んじるべしの意味)。惟だ陛下は之を察せよ。苟くも吉なるときは其の位を専らにし、凶なるときは其の患いを離れる者は、異姓之臣也。國之安きを欲し、家之貴きを祈り、存するときは其の榮えを共にし、歿するときは其の禍いを同じくする者は、公族之臣也。今反りて公族疏んぜられ而して異姓は親しまれる、臣は竊に惑う焉。今臣は陛下と冰を踐み炭を履み、山に登り澗に浮かび、寒溫燥濕、高下之を共にし、豈に陛下を離れるを得る哉!憤懣に勝たず、拜表して情を陳べる。若し合わざる有れば、乞う且く之を書府に藏し、便ち滅棄せず、臣が死する之後、事は或は思う可し。若し毫釐も少しく聖意に掛る者有れば、乞う之を朝堂に出だし、夫の博古之士をして、臣の表之義に合わざる者を糾使めよ、是くの如くならば則ち臣が願い足りなん矣。」帝は但だ優文(優渥なる文章、曹植自らの訴えも軽くいなされた)を持って答報し而して已む。(4-287P)

■[明年正月の諸王宗室公侯の招集令]八月、詔して曰く、

「先帝は令に著わし、諸王をして京都に在ら使むを欲せざる者は、幼主が位に在り、母后が攝政し、微(微細な事が成長して国家盛衰に関わる)の漸を以て、諸々の盛衰に關するを防がんと謂う也。朕は惟だ諸王を見ざること十有二載(文帝黃初元年より曹植などを国に行かせる)にして、悠悠之懷いは、能く思いを興こさざらんや!其れ諸王及び宗室の公侯をして各々適子一人を將いて明年正月に朝令めよ、後に少主にして、母后の宮に在る者有れば、自ら先帝の令の如くせよ。」

蜀[李嚴の不誠実]漢の丞相の亮之祁山を攻める也、李平(李嚴が改名、前にあり)は後に留まり、督運の事を主る。會々天は霖雨し、平は運糧の繼がざるを恐れ、參軍の孤忠(馬忠、幼き時外家に養われ孤篤という)、督軍の成藩を遣わして指を喻し(喻すに後主の旨を以てし、運糧の繼がざるをいう)、亮を呼びて來たり還らしむ。亮は承けて以て軍を退く。平の軍の退くと聞き、乃ち更に陽りて驚き、説くに、
「軍糧は饒足なり、何を以て便ち歸るや!」

又た督運の岑述を殺して以て己の辦ぜざる之責めを解かんと欲す。又た漢主に表して、説くに、

「軍は偽り退き、以て賊を誘い與に戦わんと欲す。」

亮は具に其の前後の手筆の書疏を出し、本末は違錯する。平は辭窮し情竭き、罪負を首謝(自首してむ謝す)す。是に於いて亮は平の前後の過惡を表し、免官し、爵土を削り、梓潼郡に徙す。復た平の子の豐を以て中郎將、參軍事と為し(4-287P)、教を出して之を敕めて曰く、

「吾は君父子と與に力を戮せて以て漢室を獎け、都護を表し漢中を典らしめ、君に東關(江州)を委ね、謂えらく心を至して震動し、終始保つ可し、何ぞ圖り中ごろ乖かん乎!若し都護は負(その罪負)を思い意を一に(專心一意に国の為に盡す)し、君と公琰と心を推して事に從えば、否といえど復た通じる可く、逝くとも復た還る可き也。詳しく思斯の戒めを思い、吾が心を用いるを明らかにせよ!」

蜀亮は又た蔣琬、董允に書を與えて曰く、

「孝起は前に吾が為に説けり、正方(李平の字)は腹中に鱗甲有り、郷黨は以為えらく近づく可からずと。吾は以為えらく鱗甲者但だ當に之を犯すべからざる耳と、圖らずも復た蘇、張之事(蘇秦・張儀が諸侯の間に反

復せしが如き事）有り不意に出でんとは、**孝起**をして之を知ら使む可し。」

孝起者、衛尉の南陽の**陳震**也。

呉 **〔呉の孫布の詐降戦術〕** **冬，十月**，**呉主**は中郎將の**孫布**をして詐り降り、以て揚州刺史の**王淩**を誘わ使め、**呉主**は兵を阜陵（安徽省淮泗道全椒県の東 15 里）に伏して以て之を俟つ。**布**は人を遣わして**淩**に告げて云う、

「道は遠く自ら致す能わず、乞う兵迎えられんことを。」

淩は**布**の書を騰（伝送上申）し、兵馬をもて之を迎えんと請う。征東將軍の**滿寵**は以為えらく必ず詐りならんと、兵を與えず、而して**淩**の為に報書を作りて曰く、

「邪正を知識し、禍いを避けて順に就き、暴を去りて道に歸せんと欲す、甚だ相い嘉尚す。今兵を遣わして相い迎えんと欲す、然れど計るに兵は少なく則ち相い衛るに足らず、多く則ち事は必ず遠く聞こえん。且く先ず密かに計り以て本志と成し、臨時に其の宜しきを節度せよ。」

會々**寵**は書を被りて入朝し、留府の長史を敕し、

「若し**淩**が往きて迎えんと欲すとも、兵を與える勿かれ也。」

淩は後に於いて兵を索むれども得ず、乃ち單り一督を遣わして歩騎七百人を將いて往きて之を迎えしめ、**布**は夜掩襲（続は掩撃）し、督將は迸走し、死傷は過半なり。**淩**は、**允**之兄子也。

■ **〔滿寵は體氣は康強なり〕** 是れより先**淩**は表す、

「**寵**は年過ぎ酒に耽る、方任（方面軍の任務）に居らしむ可からず。」

帝は將に**寵**を召し、給事中の**郭謀**は曰く、

「**寵**は汝南太守、豫州刺史と為ること二十餘年（漢の建安中に曹操は**滿寵**を汝南太守と為し、太和三年に豫州刺史、この年揚州都督）、方岳に勲有り。淮南に鎮するに及び、**呉**人は之を憚る。若し表する所の如くならざれば、將に窺^{うかが}う所と為る、朝に還ら令め、問うに東方事を以てし以て之を察す可し。」

帝は之に従う。既に至り、體氣は康強にして、**帝**は慰勞して遣り還す。

■ **十一月**，戊戌（34-4+1=3 1 日）晦，日之を食する有り。

■ **十二月**，戊午（54-34+1=2 1 日），博平敬侯の**華歆**は卒す。

呉 **丁卯**（3+60-34+1=3 0 日），**呉**は大赦し、明年の元を嘉禾と曰う。

太和六年（壬子，232年）

呉 **春，正月**，**呉主**の少子の建昌侯の**慮**は卒す。（4-288p）太子の**登**は武昌より入りて**呉主**に省し、因りて自ら陳ぶ、

「久しく定省（禮記の曲禮に曰く、凡そ人の子たるの禮は、冬は温にして夏は清しくし、昏には定めて晨には省すと）を離れ、子道の闕ける有り」

又た陳べるに、

「**陸遜**は忠勤なり、顧憂する所無し。」

乃ち建業に留まる。

■ **二月**，詔して諸侯王を改めて封じて、皆な郡を以て國と為す。

■ **〔幼愛女に過分な葬儀〕** **帝**の愛女の**淑**は卒す、**帝**は之を痛むこと甚しく、平原の**懿公主**と追諡し、廟を

洛陽に立て、南陵に葬す。甄後の從孫の黄を取りて之と合葬し、追封して黄を列侯と為し、之が為に後を置き、爵を襲わしむ。帝は自ら臨みて葬を送らんと欲し、又た許に幸せんと欲す。司空の陳群は諫めて曰く、

「八歳の下殤（16-19に死するを長殤、12-15を中殤、8-11を下殤、7才以下を無服の殤、生後三月以下は殤とせず）は、禮の備わざる所なり、況んや未だ期月ならず、而も成人の禮を以て之を送り、加えるに制服（服喪の制）を為し、朝を舉げて素衣し、朝夕哭臨するは、古より以來、未だ此の比（この先例）に有らず。而るに乃ち復た自ら往きて陵を視、親ら臨みて祖載（葬に始めて柩を出すこと）す！願わくは陛下は益無く損有る之事を抑割するは、此れ萬國之至望也。又た聞く車駕の許昌に幸せんと欲し、二宮の上下は、皆な悉く東に俱（続は居）にし、朝を舉げて大小、驚き怪しまざる莫し。或は言うに、以て衰を避けん（五行の氣に王有り衰あり、舍を徙して以てこれを避けるなり）と欲すと、或は言わく、以て殿捨を便移（便處に移す）せんと欲すと、或は何の故なるを知らず。臣以為うに吉凶は命有り、禍福は人に由る、移り走りて安を求めるは、則ち亦た無益なり。若し必ず當に移りて避けるは、金墉城（洛陽城の西北の別宮、後に幽閉場所）の西宮及び孟津の別宮を繕治し、皆な時を權りて分止す可し、何為れぞ宮を舉げて野次を暴露するや！公私の煩費は、量を計る可からず。且つ吉士賢人は、猶ほ妄に其の家を徙さず、以て郷邑を寧んじ、恐懼之心を無から使むべし、況んや乃ち帝王は萬國之主なり、行止動靜は、豈に輕脱（輕率）にす可き哉！」

少府の楊阜は曰く、

「文皇帝は、武宣皇后の崩ずるや、陛下は皆な葬を送らず、社稷を重んじ、不虞に備える所以也。何ぞ孩抱之赤子に至り而して葬を送らん哉！」

帝は皆な聽かず。三月，癸酉（9-3+1=7日），行きて東巡す。

呉 **公孫** **〔呉は公孫淵に馬を求める〕** 吳主は將軍の周賀、校尉の裴潛を遣わして海に乗りて遼東に之き、公孫淵に従って馬を求めしむ。

呉 **〔虞翻は呉主に諫言できず〕** 初め、虞翻（164年-233年、揚州会稽郡余姚県）は性は疏直なり、數々酒失有り、又た好みて人に抵忤（触れ逆らう）し、多く謗毀せらる。吳主は嘗て張昭と論じて神仙に及び、翻は昭を指して曰く、

「彼は皆な死人に而も神仙を語る、世に豈に仙人有る也！」

吳主は怒りを積むこと一に非ず、遂に翻を交州に徙す。周賀等の遼東に之くに及び、翻は之を聞き、以為えらく、

「五溪は宜しく討つべし、遼東は絶遠にして、聽して（彼をして）來屬せ使むべし、尚ほ取るに足らず、今人財を去（棄てる）りて以て馬を求めるは、既に國の利に非ず、又た恐らくは獲る無からん。」

諫めんと欲するも敢てせず、表を作りて以て呂岱に示し、（4-289p）岱は報ぜず。（虞翻は）愛憎（讒佞の人）の白す所と為り、復た蒼梧の猛陵（蒼梧郡に属す、廣西省蒼梧道蒼梧県、現・梧州市蒼梧県）に従る。

■夏，四月，壬寅（38-32+1=7日），帝は許昌に如く。

■五月，皇子の殷は卒す。

■秋，七月，衛尉の董昭を以て司徒と為す。

■九月，帝は行きて摩陂（河南省河洛道陝県の東南、現・三門峡市陝州区）に如き、許昌宮を治め、景福、承光殿を起こす。

■**公孫**〔**魏は公孫淵征伐は失敗**〕公孫淵は陰かに貳心を懷き、數々吳と通じる。帝は汝南太守の**田豫**をして青州の諸軍を督し海道（東萊より渤海を渡る）よりし、幽州刺史の**王雄**をして陸道（遼西より遼水を渡る）によりて之を討たしむ。散騎常侍の**蔣濟**は諫めて曰く、

「凡そ相い吞む之國に非ず、侵叛之臣にあらざれば、宜しく輕々しく伐つべからず。之を伐ち而して制す能わざれば、是れ驅りて賊を為さ使む也。故に曰く、『虎狼は路に當たれば、狐狸を治めず。』先ず大害を除けば、小害は自ら已む。今海表之地は、累世質を委ね、歲ごとに計、孝（毎年計上し及び孝廉を挙げる）を選び、職貢を乏しくせず、（而るに）議者は之を先にす。正に一舉にして便ち克た使め、其の民を得るとも國を益するに足らず、其の財を得るとも富と為すに足らず。倘（もし）（続は儻）意の如くならざれば、是れ怨みを結び信を失うと為す也。」

帝は聽さず。**豫**等は往き、皆な功無し、詔して軍を罷め令む。

■**吳**■**公孫**〔**吳主は虞翻を召還**〕**豫**は以えらく、

「吳使の**周賀**等は還るに垂々とす、歲晚風は急なれば、必ず漂浪を畏れ、東道には岸無く、當に成山（山東省膠東道營城県の東北海浜、現・威海市榮成市成山鎮）に赴くべし、成山は船を藏する之處無し」

と。遂に輒ち兵を以て成山に屯據す。**賀**等は還りて成山に至り、風に遇い、**豫**は兵を勒して**賀**等を撃ち、之を斬る。**吳主**は之を聞き、始めて**虞翻**之言を思い、乃ち**翻**を交州より召す。會々**翻**は已に卒し、其の喪を以て還る。

■**十一月**，庚寅（26+60-59+1=28日），陳の思王（曹植の諡）の**植**は卒す。

■**十二月**，帝は許昌宮に還る。

■〔**蜀を伐つに劉曄の高度な配慮**〕侍中の**劉曄**は帝の親重する所と為る。帝は將に蜀を伐たんとし、朝臣は内外皆な、

「可からず」

と曰う。**曄**は入りて帝と議し、則ち曰う、

「伐つ可し」

出でて朝臣と言う、則ち曰く、

「可からず。」

曄は膽智有り、之を言うに皆な形有り（どちらの場合も尤もらしい）。中領軍（中壘・五校・武衛等三營を主る）の**楊暨**は、帝之親臣なり、又た**曄**を重んじ、

「伐つ可からず」

之議を執ること最も堅く、内より出でる毎に、輒ち**曄**を過り、**曄**は不可之意を講ず。後に**暨**は帝と蜀を伐つ事を論じ、**暨**は切諫し、帝は曰く、

「卿は書生なり、焉んぞ兵事を知るや！」

暨は謝して曰く、

「臣の言は誠に采るに足らず、侍中の**劉曄**は、先帝の謀臣なり、常に蜀を伐つ可からずと曰う。」

帝は曰く、

「**曄**は吾と蜀伐つ可しと言う。」

暨は曰く、

「**曄**は召いて質す可き也。」

詔して**曄**を召して至り、**帝**は**曄**に問い、(4-290p) 終に言わず。後に獨り見え、**曄**は**帝**を責めて曰く、
「國を伐つは、大きな謀也、臣は大謀を與り聞くを得、常に恐るに**魅夢**(夢中に迷う)に漏洩し以て臣が罪を益さんと、焉んぞ敢えて人に向かいて之を言わん！夫れ兵は**詭道**也、軍事は未だ發せず、其の密なるを厭わず。**陛下**は顯然として之を露わす、臣は恐る敵國は已に之を聞かん矣。」

是に於いて**帝**は之を謝す。**曄**は見えて出でて、**暨**を責めて曰く、

「夫れ釣る者は大魚に中たりて、則ち縦し而して之に隨い、制す可きを須ち而る後に牽けば、則ち得ざる無からん也。人主之威は、豈に徒に大魚に而して已むや！子は誠に直臣なり、然るに計は采るに足らず、精思せざる可からざる也。」

暨も亦た之を謝す。

■ 「劉曄は疎んじられて憂死」 或は**帝**に謂って曰く、

「**曄**は忠を盡くさず、善く上の意の趣く所を伺い而して之に合わす。**陛下**は試しに**曄**と言ひ、皆な(上の)意に反し而して之を問い、若し(曄の對)皆な(上の)問う所と反する者は、是れ**曄**は常に聖意と合う也。問う毎に(曄の對)皆な(上の問う所と)同じなる者は、**曄**(の迎向)之情は必ず復た逃れる所無し矣。」

帝は言の如く以て之を驗し、果たして其の情を得、此より焉を疏んず。**曄**は遂に發狂し、出でて大鴻臚(外庠の官、侍中は内官)と為り憂を以て死す。

■ 「劉曄は才知のみで真心足りず」 《傳子》(晉の傳玄の書)は曰く、

「巧詐は拙誠に如かず、とは信なるかな矣！**曄**之明智權計を以て、若し之に居るに德義を以てし、之を行に忠信を以てすれば、古之上賢も、何を以て諸にこれに加えん！獨り才智のみに任じ、誠慤(真心)にあつからず、内に君心を失ひ、外に俗に困しみ、卒に以て自ら危くす、豈に惜しからず哉！」

■ 「陳矯は失脚せず」 **曄**は嘗て、

「尚書令の**陳矯**は專權す」

と譖り、**矯**は懼れ、以て其の子の**騫**に告ぐ。**騫**は曰く、

「主上は明聖なり、大人は大臣なり、今若し合わずとも、公と作らざるに過ぎざる耳。」

後數日にして、**帝**の意は果たして解く。

■ 「杜恕の皇帝への丁寧な上疏」 尚書郎の樂安の**廉昭**は才能を以て幸(寵幸)を得、**昭**は好みて群臣の細過を挾ことし(暴露摘發)し以て媚を上に求める。黃門侍郎の**杜恕**は上疏して曰く、

「伏して見るに**廉昭**は(尚書の)左丞の**曹璠**を奏して、罰は當に關(関白)すべきに詔に依らざるを以て、判問(分析して責問)に坐したり。又た云う、『諸々の當に坐すべき者を別に奏せん。』尚書令の**陳矯**は自ら敢えて罰を辭せずと奏し、亦た敢えて理を陳ぜず、志意は懇惻なり。臣は竊に愍然として朝廷の為に之を惜しむ！古之帝王の以て能く世を輔け民に長たる所の者は、遠くは百姓之歡心を得、近くは群臣之智力を盡くさざるは莫し。今**陛下**は萬機に憂勞、或は燈火に親しみ、而も庶事に康からず、刑禁は日々に弛む。其の由る所の原は、獨り臣のみ忠を盡さざるに非ず、亦た主も使う能わざる也。百里奚は眞に愚に而して秦に於いて智なり(韓信の言、10 卷漢高帝三年にあり)、(4-290p) **豫讓**は苟くも中行に容れられ、而も節を**智伯**に著わし、斯れ則ち古人之明驗矣(豫讓は范氏中行に事え、智伯は伐ちてこれを滅ぼすや、移りて智伯に事える。後に趙襄子が智伯を滅ぼすや、豫讓は身に漆塗り炭を呑み、必ず襄子に復讐せん。人は豫讓に問う、豫讓は曰く、范中行は衆人として我を遇せり、我は故に衆人として報ず。智伯は国士として我を遇せり、我は故に国士としてこれに報ずるなり)。若し**陛下**は今世に良才無

く、朝廷に賢佐乏しと以て為すとも、豈に稷、契之遐蹤を追望し、坐して來世之俊乂を待つ可けん乎！今之所謂賢者は、盡く大官を有^{たも}ち而して厚祿を享ける矣、然れども而して上に奉ずる之節は未だ立たず、公に向かう之心は一にならざる者、委任之責は専らならず、而して俗に忌諱多きが故也。臣は以為うに忠臣は必ずしも親しからず、親臣は必ずしも忠ならず。今疏なる者有り人を毀れば而して**陛下**は其の私に憎む所に報じると疑い、人を譽めれば而して**陛下**は其の私に親する所を愛するを疑い、左右は或は之れに因りて以て憎愛之説を進め、遂に疏なる者をして敢えて毀譽せざら使む、以て政事損益（続により補充）にも、亦た皆な嫌^{うちが}い有るに至（続は致）る。**陛下**は當に朝臣之心を闡廣し、有道之節を篤厲し、之をして自ら古の人と同じくし、名を竹帛に垂れ使むる所以を思うべし、反りて**廉昭**の如き者をして其の間を擾亂せしむ、臣は懼る大臣は將に遂に身を容れ位を保ち、坐して得失を觀、來世の戒めと為さん也。昔**周公**は**魯侯**を戒めて曰く、『大臣をして以（用）いざるを怨み使むる無かれ。』と。賢ならざれば則ち大臣と為す可からず、大臣と為せば則ち用いざる可からずと言う也。《書》には**舜**之功を數えて、四凶（共工・驩兜・鯀・三苗）を去ると稱し、罪有れば大小を問う無く則ち去ると言わざる也。今者朝臣は自ら以て不能を為さず、**陛下**を以て任せずと為す也。自ら以て不知（続は能）と為さずして、**陛下**を以て問わずと為す也。**陛下**は何ぞ**周公**之用いる所以、大**舜**之去る所以に遵わざる、侍中、尚書をして坐して則ち帷幄に侍し、行くには則ち華輦に従い、親しく詔問に對し、各々有する所を陳ぜ使めば、則ち群臣之行いは皆な得て而して知る可し、忠（続による、患×）能なる者は進め、闇劣なる者は退ければ、誰か敢えて依違し而して自ら盡くさざらんや。**陛下**之聖明を以て、親しく群臣と政事を論議し、群臣をして人ごとに自ら盡くすを得使めば、賢愚能否は、**陛下**之用いる所に在り。此を以て事を治めば、何の事か辦ぜず。此を以て功を建てれば、何の功か成らざるや！軍事有る毎に、詔書は常に曰く、『誰か當に此を憂う者を邪？吾は當に自ら憂う耳。』近詔（近く下す詔）には又た曰く、『公を憂いて私を忘れる者は必ず然らず、但だ公を先にし私を後にすれば即ち自ら辦ぜん也。』伏して明詔を讀み、乃ち聖思の下情を究盡するを知り、然れども亦た**陛下**は其の本（賢者を任用すること）を治めず而して其の末（治まる治まらない）を憂うるを怪しむ也。人之能否は、實に本性に有り、臣と雖も亦た以為らく朝臣は盡く職に稱^{かな}わざる也。明主之人を用いる也、能者をして其の力を遺^{のこ}す能（続は敢）わざる使む、而して不能者を其の任に非ざるに處るを得ざらしむ。選舉は其の人に非ず、未だ必ずしも罪有りと為さざる也。朝を舉げて共に其の人に非ざるを容れるは、乃ち怪しと為す耳。**陛下**は其の力を盡くさざるを知る也、而して之れに代わりて其の職を憂え、其の不能を知りて也、而して之れを教えて其の事を治め（4-292p）、豈に徒^{ただ}に主勞し而して臣逸する哉、聖賢世に並ぶと雖も、終に此を以て治を為す能わざる也！**陛下**は又た臺閣禁令之密ならず、人事の請屬之絶えざるを思え、迎客の出入之制を作り、惡吏を以て寺門（官舎の門）を守らしむ、斯れ實に未だ禁を為す之本を得ざる也。昔漢の**安帝**の時、少府の**竇嘉**は、廷尉の**郭躬**の無罪之兄の子を辟す、猶ほ舉奏せられ、章劾は紛紛たり。近くは司隸校尉の**孔羨**は大將軍（裴松之の説では、司馬懿のこととす、晉書に曰く、宣帝の第五弟の名は通は司隸從事たり）の狂悖之弟を辟す、而るに有司は嘿爾し、風を望みて指を希うこと、屬を受けるよりも甚だし。選舉は實を以てせざる者也。**嘉**は親戚之寵有り、**躬**は社稷の重臣に非ず、猶ほ尚ほ此くの如し。今を以て古に況^{たと}えるに、**陛下**は自ら必ず行う之罰を督し以て阿黨之原を絶たざる耳。出入之制と、惡吏が門を守るとは、治世之具に非ざる也。臣之言をして少しく察納するを蒙ら使めば、何ぞ奸の削減せざるを患い、而して**廉昭**等の若きを養わん乎！夫れ奸宄を糾擿するは、忠事也。然れども而して世は小人の之を行う者を憎み、其の道理を顧ず而して苟くも容進を求めるを以て也。若し**陛下**は復た其の終始を考えずして、必ず衆に違えて世に迂^{さから}うを以て奉公と為す、密行して人に白^{もつ}す（密告する）を節を盡くすと為せば、焉んぞ通人大才に而して更に此を為す能わ

ざる有らん邪？誠に道理を顧み而して為さざる耳。天下をして皆な道に背き而して利に趨か使むるは、則ち人主之最も病む所の者也、陛下は將たまた何を樂しまん焉！」

恕は、叢（建安中に河東に守として能名あり）之子也。

■〔司馬懿は社稷の臣か〕帝は嘗て卒^{にわか}に尚書門（尚書臺の門）に至り、陳矯は跪づきて帝に問いて曰く、「陛下は何くに之かんと欲するか？」

帝は曰く、

「文書を案行せんと欲する耳。」

矯は曰く、

「此れ自ら臣の職分にして、陛下の宜しく臨む所に非ざる也。若し臣が其の職を稱^{かな}わざれば、則ち請う黜退に就かん、陛下は宜しく還るべし。」

帝は慚じ、車を回らして而して反す。帝は嘗て矯に問う、

「司馬公は忠貞なり、社稷之臣と謂う可き乎？」

矯は曰く、

「朝廷之望也、社稷（の臣たるかどうか）は則ち未だ知らざる也。」

呉■〔陸遜は廬江に到達せず〕呉の陸遜は兵を引いて廬江に向かい、論者は以為うに宜しく速かに之れを救うべしと。滿寵は曰く、

「廬江は小なりと雖も、將勁し兵は精なり、守れば則ち經過（続は時経）せん。又た、賊は船を捨てて二百里來たる、後尾は空絶なり、來たらずとも尚ほ誘致せんと欲す、今宜しく其の遂に進むを聽すべし。但だ恐らくは走りて及ぶ可からざる耳。」

乃ち軍を整えて楊宜口（安徽省淮泗道霍丘県、現・六安市霍邱県）に趨き、呉人は之を聞き、夜遁げる。

呉■〔滿寵の策で合肥を撤退〕是の時、呉人は歳ごとに來たる計有り。滿寵は上疏して曰く、

「合肥城は南に江湖に臨み、北は壽春（魏の揚州の治所）に遠く、賊は攻めて之を圍めば、水に據りて勢いを為すを得る。官兵が之を救えば、當に先ず賊の大輩（大軍）を破るべし、（4-293p）然る後に圍乃ち解くを得る。賊の往くは甚だ易く、而るに兵は往きて之を救うは甚だ難し、宜しく城内之兵を移すべし、其の西三十里に、奇險にして依る可き有り、更に城を立てて以て固守すれば、此れ賊を平地に引いて而して其の歸路を倚すと為す、計に於いて便と為すべし。」

護軍將軍の蔣濟は議して以為く、

「既に天下に示すに弱を以てし、且つ賊の煙火を望み而して城を壞すは、此れ未だ攻められざるに而して自ら抜くと為す、一たん此に至れば、劫略されるは限り無く、必ず淮北を守ると為さん。」

帝は未だ許さず。寵重は表して曰く、

「孫子は言う、『兵者、詭道也、故に能くし而して之に能くせざるを示す、之を驕らすに利を以てし、之に示すに懼れるを以てす、』此れ形實（外形と実情）は必ずしも相い應ぜざると為す也。又た曰く、『善く敵を動かす者は之に形す。』今賊は未だ至らず而して城を移して内に卻くは、所謂形し而して之を誘う也。賊を引き水に遠ざからしめ、利を擇び而して動き、舉は外に得れば、而（続は則）して福は内に生ぜん矣！」尚書の趙咨（黄初の始めに呉より魏に使者となる、文帝はその弁給を重んじ、遂に魏に臣たり）は寵の策を以て長ずると為し、詔して遂に報じて聽す。

青龍元年（癸丑，233年）

■ 〔青龍に改元〕 春，正月，甲申（20+60-58+1=23日），青龍は摩陂の井中に見わる，二月，丁酉（33-27+1=7日《魏志・明帝紀》により補う），帝は摩陂に如き龍を觀，改元す。

〔公孫吳〕 〔公孫淵の臣従の危険〕 公孫淵は校尉の宿舒、郎中令の孫綽を遣わして奉表して吳に臣を稱す。吳主は大いに悦び、之が為に大赦す。三月，吳主は太常の張彌、執金吾の許晏、將軍の賀達を遣わして兵萬人を將い、金寶珍貨、九錫の備物を、海に乗りて淵に授け、淵を封じて燕王と為す。朝を擧げて大臣より顧雍以下は皆な諫め、以為く、

「淵は未だ信ず可からず而るに寵待は太だ厚し、但だ吏兵を遣わして舒、綽を護送し而して已む可し。」吳主は聽かず。張昭は曰く、

「淵は魏に背きて討たれるを懼れ、遠く來たりて援を求める、本志に非ざる也。若し淵が圖を改め、自ら魏に明らかにせんと欲すれば、兩使は反さざらん、亦た笑いを天下に取らざらん乎！」

吳主は反覆して昭を難じ、昭の意は彌々切なり。吳主は堪える能わず、刀（続は劍）を案じて而して怒りて曰く、

「吳國の士人は宮に入り則ち孤を拜し、宮を出でれば則ち君を拜す、孤之君を敬するは亦た至れりと為す矣、而るに數々衆中に於いて孤を折る、孤は常に計を失う（昭を容れずしてこれを殺す事）を恐れる！」

昭は吳主を熟視して曰く、

「臣は言の用いられざるを知ると雖も、毎に愚忠を竭くす者は、誠に太后の崩ずる（65卷漢獻帝建安12年）に臨みて、老臣を床下に呼び、遺詔の顧命之言の故に在る耳を以てす。」

因りて涕泣して横に流れる。吳主は刀を地に擲げて、之と對して泣く。然れども卒に彌、晏を遣わして往かしむ。昭は言之用いられざるを忿り、疾と稱して朝せず。吳主は之を恨み、土をもって其の門を塞ぎ、昭も又た内に土を以て之を封じる。（4-294p）

■ 夏，五月，戊寅（14+60-56+1=19日），北海王の蕤は卒す。

■ 閏月（元嘉曆六月、元嘉曆では八月に閏月あり），庚寅（1日）朔，日之を食する有り。

■ 六月，洛陽宮の鞠室（蹴鞠の部屋）は災す。

■ 〔鮮卑の軻比能の討伐に失敗〕 鮮卑の軻比能は塞を保つ（70卷文帝黃初五年にあり）鮮卑の步度根を誘い與に深く和親を結び、自ら萬騎を勒して其の累重（身のわずらいとなる妻子資産の類）を陜北（陜嶺の北、山西省舊大同・寧武・朔平の三府と代州の西北）に迎える。并州（荊州を章注及《魏志・明帝紀》により改）刺史の畢軌は表して輒ち軍を出し、以て外は比能を威し、内は步度根を鎮せんとす。帝は表を省みて曰く、

「步度根は已に比能の誘う所と為り、自ら疑心有り。今軌は軍を出し、慎んで塞を越え句注（山西省雁門道代県の西北に句注山、西陁山、陁嶺、現・忻州市代県）を過ぎる勿かれ」

詔書の到る比おい、軌は已に進軍して陰館（山西省雁門道代県の西北に句注山の北、現・忻州市代県）に屯し、將軍の蘇尚、董弼を遣わして鮮卑を追わしむ。軻比能は子を遣わして千餘騎を將して步度根を部落に迎えしめ、尚、弼と相い遇い、樓煩に戦い、二將は没し、步度根は洩歸泥（続は洩歸泥、扶羅韓の子）の部落と皆な叛して

塞を出、軻比能と合い邊を寇す。帝は驍騎將軍の秦朗を遣わして中軍を將いて之を討たしめ、軻比能は乃ち幕北に走り、洩歸泥は其の部衆を將いて來降す。步度根は尋いで軻比能の殺す所と為る。

【公孫淵の裏切りに孫権は激怒】

公孫 吳 **〔公孫淵は吳を裏切り楽浪公となる〕** 公孫淵は吳の遠く恃み難しを知り、乃ち張彌、許晏等の首を斬り、京師に傳送し、悉く其の兵資珍寶を沒す。冬、十二月、詔して淵を大司馬に拜し、楽浪公に封じる。(張昭の言う通りになる)

吳 **〔孫権は公孫淵裏切りに驚く〕** 吳主は之を聞き、大いに怒りて曰く、

「朕は年六十なり、世事の難易は、靡びる所嘗てあらず。近ごろ鼠子(公孫淵の事)の前卻(進退)する所と為り、人の氣をして踴りて山に如くなら令む。自ら鼠子の頭を截ちて以て海に擲たざれば、復た萬國に臨む顔無し。就令顛沛するとも、以て恨みと為さず！」

吳 **〔陸遜は孫権が遼東に親征するを止める〕** 陸遜は上疏して曰く、

「陛下は神武之姿(統は資)を以て、^{おお}誕いに期運に^{あた}膺り、操(曹操、65 卷漢獻帝建安 13 年)を烏林に破り、備(劉備、69 卷文帝黃初二年)を西陵に敗り、羽(關羽、68 卷建安 24 年)を荊州に禽とす。斯の三虜の者は、當世の雄傑なり、(陛下は)皆な其の鋒を摧く。聖化の綏んずる所は、萬里に草のごとく偃し、方に華夏を蕩平し、大猷(大なる謀)を總一せんとす。今小忿に忍びず而して雷霆之怒りを發して、垂堂(千金の子は坐すに堂に垂せず。垂せずとは堂の外辺に坐せざる也。墜落するを恐れるからなり。自ら愛すること深きをいう。以て孫権が當に自ら海を越えて兵を遼東に加えるべからずを喻えた)之戒めに違ひ、萬乘之重きを輕んじるは、此れ臣之惑う所也。臣は之を聞く、萬里を行く者は中道に而して足を輟めず、四海を^{はか}圖る者は細を懷いて以て大を害せず。強寇は境に在り、荒服未だ庭(朝貢)せず、陛下は桴に乗りて遠征し、必ず^{きく}闐闐(下の者が上に向かって願うべからざるを願う事)を致し、戚至り而して憂い、之を悔いても及ぶ無し。若し大事をして時に捷た使めば、則ち淵は討たずして自ら服さん。今乃ち遠く遼東の衆と馬(公孫淵に馬を求めたのは前年三月)とを惜しみ、(4-295p)奈何ぞ獨り江東の萬安之本業を捐て而して惜しまざらんと欲する乎！」

吳 **〔薛綜も吳主に諫言〕** 尚書僕射の薛綜は上疏して曰く

「昔漢の元帝は樓船に御せんと欲し(28 卷永光二年)、薛廣德は頸を刎ねて血を以て車を染めんと請う。何となれば則ち？水火之險は至りて危うし、帝王の宜しく渉る所に非ざる也。今遼東は戎貊の小國なり、城隍之固め、備御之術は無く、器械は銖(極めて軽い)鈍にして、犬羊のごとく政無し、往けば必ず禽克せんは、誠に明詔の如し。然れども其の方土は寒塽(氣候寒く地味瘠せた)にして、穀稼は殖せず、民は鞍馬に習い、轉り徙ること常無く、卒に大軍之至るを聞けば、自ら敵せざるを^{はか}度り、鳥のごとく驚き獸のごとく駭き、長驅して奔竄し、一人匹馬も、見るを得可からず、空地を獲ると雖も、之を守りて益無し、此れ不可の一也。加えるに又た洪流は滉漾(水の深く広い様)として混(統には無し)わり、成山之難有り、海行は常無く、風波は免れ難く、倏忽之間に、人船は勢いを異にし、堯、舜之徳有りと雖も、智(統は無し)の施す所無く、賁、育之勇力も設けるを得ず、此れ不可の二也。加えて郁霧を以て其の上に^{くら}冥く、鹵水は其の下に蒸し、善く流腫(毒氣下流して腫となる、脚氣の如き)を生じ、轉た相い汚染(伝染)す、凡そ海を行く者は、斯の患い無きは稀なり、此れ不可の三也。天は神聖を生じ、當に時に乗じ亂を平らげ、此の民物を康んず。今逆虜は將に滅びんとし、海内は定まるに垂々とし、乃ち必然之圖に違ひ、危に至る之阻を尋ね、九州之固めを^{おろさ}忽かにし、一朝之忿りを^{ほしいまま}肆にするは、既に社稷之重計に非ず、又た開闢以來未だ嘗て有らざる所、斯れ誠に群僚の身を傾けて息を側め、食して甘味となさず、寢て席を安じざる所以の者也。」

呉 **〔陸瑁も諫めるも未だ許さず〕** 選曹尚書の**陸瑁**は上疏して曰く、

「北寇（魏）は國と、壤地連接し、苟くも間隙有れば、機に應じ而して至らん。夫れ海を越えて馬を求め、意を淵に曲げるを為す所以の者は、目前之急に赴き、腹心之疾を除かんが為也。而るに更に本を棄て末を追ひ、近きを捐て遠きを治め、忿り以て規（計画）を改め、激して以て衆を動かすは、斯れ乃ち猾虜（魏）の聞かんと願う所なり、大呉之至計に非ざる也。又た兵家之術は、功役を以て相い疲れさせ、勞逸相い待ち、得失之間は、覺る所輒ち多し。且つ沓渚（遼東郡の沓氏県、遼東郡平郭県、現・大連市金州区）は淵を去ること、道裡は尚ほ遠く、今其の岸に到れば、兵勢は三分し、強者をして進取せ使め、次に當に船を守り、又た次に糧を運び、行く人は多しと雖も、悉く用いるは得難し。加えるに以て單歩して糧を負い、遠きを経て深く入り、賊地は多馬く、邀え截つは常無し。若し淵が狙詐（猿の如く狡猾に欺く）し、北（魏）未だ絶たざれば、

（4-296p）衆を動かす之日、脣齒のごとく相い濟わん。若し實に子然（孤立して支援無し、底本には了然に作る）として憑頼（頼りにする、神懸かり）する所無し、其の畏怖して遠く迸り、或は卒に滅し難し、天誅をして朔野（北方の原野）に稽まら使めば、山虜（丹陽・豫章・鄱陽・廬陵・新都等の郡の山越）は間に乘（続による、承?）り而して起り、恐らくは萬安之長慮に非ざる也！」

呉主は未だ許さず。

呉 **〔呉主は公孫氏討伐断念〕** 瑁重は上疏して曰く、

「夫れ兵革者、固より前代の暴亂を誅し、四夷を威す所以也。然るに其の役は皆な奸雄已に除き、天下無事にして、廟堂之上に従容として、餘議を以て之を議すに在る耳。中夏は鼎沸し、九域は盤互（各々その地に蟠踞して互いに争う）する之時に至りては、率ね須く根は深く本は固く、力を愛み費を惜しみ、未だ正に此の時に於いて近きを捨てて遠きを治め、以て軍旅を疲らす者有らざる也。昔尉佗（13 卷漢文帝元年）は叛逆し、僭號して帝を稱し、時に天下は乂安に、百姓は康阜なり、然れども漢文は猶ほ遠征は易からざるを以て、告諭し而して已む。今凶桀は未だ殄えず、疆場は猶ほ警し、未だ宜しく淵を以て先と為すべし。願わくは陛下は威を抑え計に任じ（呉志陸瑁傳には計を住め）、暫く六師を寧んじ、神を潛め規を嘿し、以て後圖と為せば、天下は幸甚なり！」

呉主は乃ち止む。

呉 **〔孫權は漸く張昭を朝會す〕** 呉主は數々人を遣わして張昭を慰め謝し、昭は因（続は固く）りて起たず。呉主は因りて出で、其の門を過ぎて昭を呼び、昭は疾篤しと辭す。呉主は其の門を燒き、以て之を恐れささんと欲す、昭は亦た出ず。呉主は人をして火を滅せ使め、門に住まること良く久し。昭の諸子は共に昭を扶けて起たせ、呉主は載せて以て宮に還り、深く自ら克責す。昭は已むを得ず、然る後に朝會す。

公孫 **〔秦旦ら高句麗から帰還〕** 初め、張彌、許晏等は襄平（遼東郡の治所の県、奉天省遼瀋道遼陽県の北、現・遼陽市遼陽県）に至り、公孫淵は之を圖らんと欲し、乃ち先ず其の吏兵を分散し、中使の秦旦、張群、杜德、黃強等及び吏兵六十人は玄菟に置く。玄菟（奉天附近）は遼東の北二百里に在り、太守の王贊は、戸二百を領し、旦等は皆な民家に捨し、其の飲食を仰ぎ、四十許りの日を積む。旦は群等と議して曰く、

「吾人は遠く國命を辱め、自ら此に棄てられる、死すると異なる無し。今此の郡を觀るに、形勢は甚だ弱く、若し一旦同心すれば、城郭を焚燒し、其の長吏を殺し、國の為に恥を報い、然る後に伏して死せば、以て恨み無しに足らん。孰與ぞ生を偷みて苟くも活き、長く囚虜と為るを乎！」

群等は之を然りとす。是に於いて陰かに相い結約し、當に八月十九日の夜を用て發す。其の日中の時、郡中の張松の告げる所と為り、贊は便ち士衆を會し、城門を閉め、旦、群、德、強は皆な城を逾えて走るを

得る。時に**群**は疽を病み創は膝に著き、輩旅（仲間）に及ばず、**徳**は常に扶接（介護）し與に俱に、山谷に崎嶇（困難して行く）して、行くこと六七百里、創は益々困しみ、復た能く前まず、草中に臥し、相い守りて悲泣す。**群**は曰く、

「吾は不幸にして創は甚しく、死亡するに日無し、卿ら諸人は宜しく速かに道を進め、冀くは達する所有らん、空しく相い守りて俱に窮谷之中に死するは、何の益ある也！」（4-297p）

徳は曰く、

「萬里に流離し、死生は之と共にせん、相い委てるに忍ばず。」

是に於いて**旦**、**強**を推して前ま使め、**徳**は獨り留まりて**群**を守り、菜果を採りて之を食す。**旦**、**強**は別れること數日、句麗に達するを得、因りて**吳主**の詔を句麗王の**位宮**（高句麗 11 代王の東川王）及び其の主簿に宣べ、**糾**（続による、給?）きて言わく、

「賜わりもの有り、遼東の劫奪する所と為る。」

位宮等は大いに喜び、即ち詔、命を受け人をして**旦**に隨いて還りて**群**（徳とするあり、章注及《吳志・孫權傳》注引《吳書》により補う）を迎え使め、早衣二十五人を遣わして、**旦**等を送りて吳に還し、奉表して臣と稱し、貂皮千枚、鶡雞（雉の屬、やや大、黄黒色で頭に毛冠あり）皮十具を貢ぐ。**旦**等は**吳主**に見え、悲喜自ら勝つ能わず。**吳主**は之を壯とし、皆な校尉を拜す。

吳 **〔滿寵は吳軍を迎撃し撃破〕** 是の歲、**吳主**は兵を出して（合肥西の）新城を圍まんと欲し、其の水に遠きを以て、二十餘日を積み、敢えて下船（大舟は岸より高く、下船という）せず。**滿寵**は諸將に謂って曰く、

「**孫權**は吾が城を移すを得て、必ず其の衆中に於いて自大（自ら尊大にする）之言有り。今大舉して來たりて、一切之功（何らかの功を立てんとする）を要めんと欲し、敢えて至らずと雖も、必ず當に岸に上りて兵を耀かし以て餘り有るを示さん。」

乃ち潜かに歩騎六千を遣わして、肥水の隱處に伏し以て之を待つ。**吳主**は果たして岸に上り兵を耀かし、**寵**の伏軍は卒に起ちて之を撃ち、斬首は數百、或は水に赴きて死する者有り。**吳主**は又た**全綜**をして六安を攻め使め、亦た克たず。

蜀 **〔張翼から馬忠への引き継ぎ万全〕** **蜀**（司馬光は漢と改めず）の**庾降**（蜀の後主が建康三年に益州郡を分けて置く）の都督の**張翼**は、法を用いるに嚴峻にして、南夷の豪帥の**劉胄**は叛す。丞相の**亮**は參軍の巴西の**馬忠**を以て**翼**に代わらしめ、**翼**を召して還ら令む。其の人（部下）は**翼**に謂う、

「宜しく速かに歸りて罪に即くべし。」

翼は曰く、

「然らず、吾は蠻夷の蠢動して、職に稱わざるを以て、故に還る耳。然れども代わる人は未だ至らず、吾は方に戦場に臨み、當に糧を運び穀を積み、賊を滅ぼす之資と為すべし、豈に黜退せられる之故を以て而して公家之務めを廢す可けん乎！」

是に於いて統攝して懈らず、代は到りて乃ち發す。**馬忠**は其の成基に因りて、**胄**を破り、之を斬る。

蜀 **〔諸葛亮は三年用意万端〕** **諸葛亮**は農を勧め武を講じ、木牛、流馬（一輪車）を作り、米を運びて斜谷口に集め、斜谷の邸閣を治す。民を息め士を休めること三年、而る後に之を用いる。

青龍二年（甲寅，234年）

蜀 **〔諸葛亮は最後の出陣〕** **春，二月**，亮は大衆十萬を悉くして斜谷由り入寇し，遣使して吳に約し同時に大舉せしむ。

■ **三月**，庚寅（26-21+1=6日），**山陽公**（後漢獻帝、年54）は卒す，**帝**は素服して喪を發す。

■ 己酉（45-21+1=25日），大赦す。（4-298p）

■ **夏，四月**，大疫す。

■ 崇華殿は災す。

■ **蜀** **〔諸葛亮は五丈原に駐屯〕** 諸葛亮は郿に至り，渭水之南に軍す。**司馬懿**は軍を引いて渭を渡り，水を背にして壘を為りて之を拒み，諸將に謂って曰く、

「亮が若し武功（陝西省關中道武功県、現・咸陽市武功県武功鎮）に出でれば，山に依りて而して東し，誠に憂う可きと為す。若し西して五丈原（陝西省關中道郿県の西南、現・宝鸡市眉県渭水南岸）に上れば，諸將は事無し矣。」

亮は果たして五丈原に屯す。

■ **蜀** **〔郭淮は北原に駐屯し蜀を迎撃〕** 雍州刺史の**郭淮**は懿に言つて曰く、

「亮は必ず北原を爭はん，宜しく先ず之に據るべし。」

議者は多く然らずと謂い，淮は曰く

「若し亮が渭に跨がり原に登り，兵を北山に連ね，隴道を隔絶し，民夷を搖蕩すれば，此れ國之利に非ざる也。」

懿は乃ち淮をして北原に屯せ使む。塹壘未だ成らざるに，漢兵は大いに至り，淮は逆えて撃ちて之を卻ける。

蜀 **〔蜀は屯田策をとる〕** 亮は以えらく前者に數々出でて，皆な運糧繼がざるを以て，己の志を伸びざる使む，乃ち兵を分けて屯田し久しく駐まる之基と為し，耕す者は渭濱の居民之間に雜わり，而して百姓は安堵し，軍は私する無し焉。

【合肥新城の魏吳対戦】

吳 **〔吳は合肥新城を攻める〕** **五月**，吳主は入りて巢湖口（安徽省安慶道巢県、現・合肥市巢湖市）に居り，合肥の新城に向かい，衆は十萬と號す。又た**陸遜**、**諸葛瑾**を遣わして萬餘人を將いて江夏、沔口に入り，襄陽に向かう。將軍の**孫韶**、**張承**は淮に入り，廣陵、淮陰に向かう。**六月**，**滿寵**は諸軍を率いて新城を救わんと欲し，殄夷將軍（魏の置く官）の**田豫**は曰く、

「賊は衆を悉くして大舉し，小利を圖るに非ず，新城を質をして以て大軍を致さんと欲する耳。宜しく（賊をして）城を攻め使めるを聽し，其の銳氣を挫き，當に與に鋒を爭うべからざる也。城拔く可からざれば，衆は必ず罷怠（疲れ怠る）せん。罷怠すれば然る後に之を撃ち，大いに克つ可き也。若し賊が計を見れば（賊が我が敵を待つ所以を知れば），必ず城を攻めず，勢いは將に自ら走らんとす。若し便ち兵を進めば，其の計に入るに適う矣。」

■ **〔魏の劉邵の進言〕** 時に東方の吏士は皆な分休（交代で休息）し，**寵**は表す、

「請う，中軍の兵を召し、並せて休む所の將士を召し，集まるを須ちて之を撃たん。」

散騎常侍の廣平の**劉邵**は議して以為く、

「賊衆は新たに至り，心ず専ら氣鋭し，**寵**は少人を以て自ら其の地に戦う，若し便ち進撃すれば，必ず制する能わず。**寵**が兵を待たんと請うは，未だ失う所有らざる也，以為うに先ず歩兵五千，精騎三千を遣わし，軍に先だちて前に發し，揚聲して道を進め，形勢を震曜し、騎が合肥に到り，其の行隊を疏にし，其

の旌鼓を多くし、兵を城下に曜かし、引きて賊の後ろに出、其の歸路を擬し、其の糧道を要す可し。賊は大軍の來たりて、騎が其の後を斷つを聞けば、必ず震え怖れて遁げ走り、戦わずして自ら破れん矣。」
帝は之に従う。

■ **「魏皇帝出征で、孫權は撤退」** 寵は新城の守りを抜き、賊を壽春に致さんと欲す、帝は聽さず、曰く、
(4-299p)

「昔漢の**光武** (42 卷建武八年) は兵を遣わして略陽に據らしめ、終に以て隗囂を破る、**先帝**は東に合肥を置き、南に襄陽を守り、西に祁山を固め、賊は來たりて輒ち三城之下に破れる者は、地は必ず争う所に有れば也。縦え**權**が新城を攻めるとも、必ず抜く能わず。諸將に敕して堅く守らしめ、吾は將に自ら往きて之を征せん、至る比おい、恐らくは**權**は走らん也。」

乃ち征蜀護軍の**秦朗**をして歩騎二萬を督して**司馬懿**を助けて**諸葛亮**を御が使め、**懿**に敕して、

「但だ壁を堅くして拒ぎ守り以て其の鋒を挫けば、彼は進みて志を得ず、退きて與に戦う無し、久しく停まれば則ち糧は盡さん、虜は略するも獲る所無く、則ち必ず走る。走り而して之を追えば、全勝之道也。」

秋、七月、壬寅 (38-19+1=2 0 日、章注及《魏志・明帝紀》補)、**帝**は龍舟に御して東征す。**滿寵**は壯士を募りて吳の攻具を焚き、**吳主**之弟の子の**泰**を射殺す。又た吳の吏士は多く疾病す。**帝**は未だ至らざること數百里、疑兵は先ず至る。**吳主**は始めて謂えらく、

「**帝**は出でる能わず」

と。大軍の至るを聞き、遂に遁げ、**孫韶**も亦た退く。

■ **「陸遜の名撤退作戰、魏主は壽春に至る」** **陸遜**は親人の**韓扁**を遣わして奉表して**吳主**に詣らしめ、邏者(巡邏者)は之を得る。**諸葛瑾**は之を聞き甚だ懼れ、書して**遜**に與えて云わく、

「大駕は已に還り、賊は**韓扁**を得、^{つぶさ}具に吾が闊狹(内情)を知り、且つ水は干く、宜しく當に急ぎ去るべし。」

遜は未だ答えず、方に人を催^{うな}がして封^{ほう}(かぶら)、豆を種えしめ、諸將と弈棋、射戲すること常の如し。**瑾**は曰く、

「**伯言**(**陸遜**の字)は智略多し、其れ必ず當に以^{ゆえ}有るべし。」

乃ち自ら來たりて**遜**を見る。**遜**は曰く、

「賊は大駕の已に還るを知り、復た憂うる所無く、専ら力を吾にするを得る。又た已に要害之處を守り、(吾が)兵は將に意動かんとす、且く當に自ら定めて以て之を安んじ、變術を施設し、然る後に出でる耳。今便ち退くを示せば、賊は當に吾が怖れると謂い、仍りて來りて相い蹙^{しぼら}り、必ず敗れる之勢い也。」

乃ち密かに**瑾**と計を立て、**瑾**をして舟船を督せ令め、**遜**は悉く兵馬を上らせて以て襄陽城に向かう。魏人は素より**遜**の名を憚り、遽^{にわか}に還りて城に赴く。**瑾**は便ち船を引いて出で、**遜**は徐^{おもむろ}に部伍を整え、聲勢を張拓し、歩して船に趣き、魏人は敢えて逼らず。行きて白圍(囲みを立てて白河口に屯す、その名とする)に到り、託言往獵、潜に將軍の**周峻**、**張梁**等を遣わして江夏(以下皆江夏郡に属す)、新市(湖北省襄陽道京山県の東北、現・荊門市京山市)、安陸(湖北省江漢道安陸県、現・孝感市安陸市)、石陽(湖北省江漢道黄陂県の西、現・武漢市黄陂区)を撃ち、斬獲は千餘人而して還る。群臣は以為えらく**司馬懿**は方に**諸葛亮**と相い守りて未だ解かず、車駕は西に長安に幸す可しと。**帝**は曰く、

「**權**は走り、**亮**は膽破す、大軍は以て之を制するに足る、吾は憂い無し矣。」

遂に進軍して壽春に至り、諸將の功を録し、封賞して各々差有り。

■ **八月、壬申** (8+60-48+1=2 1 日)、漢の**孝獻皇帝**を禪陵(濁鹿城の西北十里、河南省河北道修武県、現・焦作市修武県)

に葬す。

■辛巳（17+60-48+1=30日）、帝は許昌に還る。

【諸葛亮は五丈原に死す】

■蜀 〔司馬懿は諸葛亮の挑戦に乗らず〕 司馬懿は諸葛亮と相い守ること百餘日、亮は數々挑戦し、懿は出でず。（4-300p）亮は乃ち懿に巾幘（^{きんかく}婦人の着る物）婦人之服を遺る。懿は怒り、上表して戦わんと請い、帝は衛尉の辛毗をして節を杖りて軍師と為して以て之を制せ使む。護軍の姜維は亮に謂って曰く、
「辛佐治は節を杖り而して到る、賊は復た出でず矣。」

亮は曰く、

「彼は本から戦う情無し、固く戦いを請う所以の者は、以て其の衆に武を示す耳。將は軍に在りては、君命も受けざる所有り、苟くも能く吾を制せり、豈に千里に而して戦いを請わん邪！」

■蜀 〔司馬懿は諸葛亮の疲労を知る〕 亮は使者を遣わして懿の軍に至らしめ、懿は其の寢食及び事之煩簡を問う、戎事（軍事）を問わず。使者は對えて曰く、

「諸葛公は夙に興き夜に寐ね、罰（鞭打ち刑）二十已上は、皆な親ら焉を覽ず。啖食する所は數升に至らず。」

懿は人に告げて曰く、

「諸葛孔明の食は少なく事は煩わし、其の能く久しき乎！」

蜀 〔李福は諸葛亮の後継者を問う〕 亮の病は篤く、漢（漢主、章注及び《蜀志・楊宗傳》の注引《益部耆舊雜記》で補う）は尚書僕射の李福をして省侍し、因りて諮るに國家の大計を以てせ使む。福は至り、亮と語り已わり、別れ去り、數日にして復た還る。亮は曰く、

「孤は君の還る意を知る、近日言語は日を彌ると雖も、盡くさざる所有り、更に來たりて亦た決（^{わた}續は決を求める）する耳。公の問う所の者は、公琰（蔣琬の字）は其れ宜しき也。」

福は謝し、

「前に實に失して、如し公百年の後に誰か大事に任じる可き者なるやを咨請せず、故に輒ち還る耳。乞う復た蔣琬之後、誰に任ずる可き者やを請う？」

亮は曰く、

「文偉（費禕の字）は以て之を繼ぐ可し。」

又た其の次を問い、亮は答えず。

■蜀 〔死せる諸葛は生ける仲達を走らす〕 是の月、亮は軍中に於いて卒す。長史の楊儀は軍を整え而して出ず。百姓は奔りて司馬懿に告げ、懿は之を追う。姜維は儀をして旗を反し鼓を鳴らし、將に懿に向かわんとする者の若くせ令む、懿は軍を斂めて退き、敢えて逼らず。是に於いて儀は陳を結び而して去り、谷（斜谷）に入り然る後に喪を發す。百姓は之が諺を為して曰く、

「死せる諸葛は生ける仲達（司馬懿の字）を走らす。」

懿は之を聞き、笑いて曰く、

「吾は能く生を料る、死を料る能わざる故也。」（諸葛亮が生きている間は料れたが、死んでは無理との負け惜しみ）

懿は亮之營壘の處所を案行し、歎じて曰く、

「天下の奇才也！」

追いて赤岸（陝西省漢中道留壩県、現・漢中市留壩県）に至り、及ばず而して還る。

【蜀の魏延は討伐される】

蜀 **【魏延と楊儀は水火の仲】** 初め、漢の前軍師（蜀に前後軍師あり）の**魏延**は、勇猛なること人に過ぎ、善く士卒を養う。毎に**亮**に隨いて出で、輒ち兵萬人を請いて、**亮**と道を異として潼關に會すること、**韓信**の故事（9 卷漢の高帝二年）の如くとせんと欲す、**亮**は制し而して許さず。**延**は常に**亮**に謂って怯と為し、己の才用之盡くさざるを嘆恨す。**楊儀**の人と為りは幹敏（才幹あり俊敏）にして、**亮**が軍を出す毎に、**儀**は常に規畫分部し、糧穀を籌度して、思慮を稽めず、斯須にして便ち了わり、軍戎の節度は、辦を**儀**に取る。**延**の性は矜高にして、當時皆な避けて之に下る、（4-301p）唯だ**儀**のみは**延**に假借せず、**延**は以て忿りに至ると為し、水火（甚だ仲が悪い）の如き有り。**亮**は深く二人之才を惜しみ、偏廢する所有るに忍びざる也。

吳 **蜀** **【使者費禕を後主は擲擿】** **費禕**は吳に使し、**吳**主は酔いて、**禕**に問いて曰く、

「**楊儀**、**魏延**は牧豎の小人也、嘗て時務に鳴吠之益（鶏鳴狗吠、些細な功劳）有りと雖も、然るに既に已に之に任じれば、勢いは軽くするを得ず。若し一朝**諸葛亮**無ければ、必ず禍亂と為らん矣。諸君は憤憤（心乱れる様）として、此を防慮するを知らず、豈に所謂厥の孫謀（子孫のためにする計画）を貽する乎！」

禕は對えて曰く、

「**儀**、**延**之協せざるは、私忿より起こる耳、而して**黥**（黥布）、**韓**（韓信）の御し難き之心無き也。今方に強賊を掃除し、函夏（中華）を混一せんとし、功は才を以て成り、業は才に由りて廣まり、此を捨てて任ぜず、其の後患を防げば、是れ猶ほ風波有るに備え而して逆め舟楫を廢するがごとし、長計に非ざる也。」

蜀 **【魏延は費禕に逃げられる】** **亮**の病困（重体）するや、**儀**及び司馬の**費禕**等と與に身歿するの之後に退軍の節度を作り、

「**延**をして後を斷た令め、**姜維**をして之に次せよ、若し**延**が或は命に従わざれば、軍便は自ら發すべし」。

亮は卒し、**儀**は秘して喪を發せず、**禕**をして往きて**延**の意指を揣ら令む。**延**は曰く、

「丞相は亡すと雖も、吾は自ら見在す。府親官屬（長史以下）は、便ち喪を將いて還り葬る可し、吾は當に自ら諸軍を率いて賊を撃たん。云何ぞ一人の死を以て天下之事を廢する邪！且つ**魏延**は何人ぞや、當に**楊儀**之部する所の勒と為り、後を斷つの將と作らん乎！」

自ら**禕**と共に行（葬列）留（防禦部隊）の部分を作り、**禕**をして手書して己と與に連名して、下の諸將に告げ令めんとす。（**魏延**は**楊儀**が自分に従わないのを予期して、**費禕**と行留の処分の書を書こうとした）**禕**は**延**を給いて曰く、

「當に君の為に還りて**楊**長史に解（弁解）すべし。長史は文史なり、軍事を更ること稀なり、必ず命に違わざる也。」

禕は門を出で、馬を奔らせて而して去る。**延**は尋いで之を悔やむも、已に及ばず矣。

蜀 **【魏延は楊儀らに討伐される、叛意無し】** **延**は人を（続は遣）して**儀**等を覘わ使め、**亮**の成規を案じ、諸營は相い次ぎて軍を引き還らんと欲す、**延**は大いに怒り、**儀**が未だ發せざるに攙（刺す、差し込む）ち、所領を率いて徑に先に南に歸り、過ぎる所閣道（棧道）を燒絶す。**延**、**儀**は各々相い叛逆すと表し、一日之中に、羽檄は交々至る。**漢**主は以て侍中の**董允**、留府長史の**蔣琬**に問い、**琬**、**允**は咸な**儀**を保して而して**延**を疑う。**儀**等は山を槎して道を通じせ令め（棧道を断たれたので山に木を刺し込んで道を造る）、晝夜兼行して、亦た**延**の後に繼ぐ。**延**は先ず至り、南谷（褒谷）口に據り、兵を遣わして**儀**等を逆撃せしめ、**儀**等は將軍の**何平**（王平、元は外家の何氏に養われる）をして前に於いて**延**を御が令む。**平**は先登（先鋒、先駆け、一番乗り）を叱して曰く、

「公は亡し、身は尚ほ未だ寒からず、汝輩は何ぞ敢えて乃ち爾るや！」

延の士衆は曲の**延**に在るを知り、（4-202p）為に命を用いる莫く、皆な散る。**延**は獨り其の子數人と逃亡

し、漢中に奔り、**儀**は將の**馬岱**を遣わして追いて之を斬らしめ、遂に**延**の三族を夷ぐ。**蔣琬**は宿衛の諸營を率いて北行して難に赴き、行くこと數十里、**延**の死問（死すとの情報）は至り、乃ち還る。始め、**延**は**儀**等を殺さんと欲し、時論は己を以て**諸葛**に代わりて輔政せんことを冀い、故に北に魏に降らず而して南に還りて**儀**を撃ち、實に反意は無き也。

蜀 **〔成都は自給可能との遺言〕** 諸軍は成都に還り、大赦し、**諸葛亮**に諡して**忠武侯**と曰う。初め、**亮**は漢主に表して曰く、

「成都は桑八百株、薄田十五頃有り、子弟の衣食は自ら餘饒し、臣は別に生を治めて以て尺寸を長ぜず。若し臣の死する之日、内に餘帛有り、外に**贏財**（あり余る財貨）有り、以て**陛下**に負か使めず。」卒に其の言う所の如し。

蜀 丞相の長史の**張裔**は常に**亮**に稱して曰く、

「公は賞は遠きを遺さず、罰は近きに阿さず、爵は功無きを以て取る可からず、刑は勢の貴きを以て免る可からず、此れ賢愚之僉な其の身を忘れる所以の者也！」

蜀 **〔諸葛亮は管仲・蕭何に匹敵〕** **陳壽**は評して曰く、

「**諸葛亮**之相國為る也、百姓を撫し、儀軌（法度）を示し、官職を約し、權制に従い、誠心を開き、公道を布く。忠を盡し時を益する者は、**讎**と雖も必ず賞し、治を犯し怠慢なる者は、親と雖も必ず罰し、罪に服し情を輸す者は、重きと雖も必ず釋し、辭を游ばせ巧飾する者は、輕きと雖も必ず戮す。善は微なるも而して賞せざるは無く、惡は纖とも而して貶せざる無し。庶事に精練し、其の本を物理し、名に循い實を責め、虚偽は**齒**せず。終に邦域之内に於いて、鹹な畏れ而して之を愛す、刑政は峻と雖も而して怨む者無く、其の心を用いるに平かに而して勸戒すること明らかなるを以てす也。治を識る之良才、**管**（管仲）、**蕭**（蕭何）之亞匹（次の偶）と謂う可き矣！」

蜀 **〔諸葛亮に左遷された廖立と李平〕** 初め、長水校尉の**廖立**は、自ら謂えらく才名は宜しく**諸葛亮**之副と為るべしと、常に職位の游散（閑散で重要でない）なるを以て、怏怏として怨謗すること已む無し、**亮**は立を廢して民と為し、之を汶山（四川省西川道茂県、現・アバ・チベット族チャン族自治州茂県）に従す。**亮**の卒すに及び、**立**は泣を垂れて曰く、

「吾は終に左衽（左前の衣服は夷狄）と為らん矣！」

李平（太和五年に廢されて徙される）は之を聞き、亦た病を發して死す。**平**は常に**亮**の復た己を收め、自ら補復するを得ることを冀い、後人の能わざらんことを策する故也。

蜀 **〔水鑒の境地〕** **習鑿齒**は論じて曰く、

「昔**管仲**（論語憲問篇にあり）は**伯氏**（齊の大夫の罪あるに）の駢邑三百を奪い、齒を沒し而して怨言無し、聖人は以て難しと為す。**諸葛亮**之**廖立**をして泣を垂れ、**李嚴**をして死に致ら使むは、豈に徒らに怨言無く而して已哉！夫れ水は至って平らかに而して邪なる者は法を取り、鑒（鏡）は至って明らかに而して丑なる者は怒りを忘れる。水鑒之能く物を窮め而して怨み無き所以の者は、其の私無きを以て也。水鑒の私無きは、（4-303p）猶ほ以て謗りを免る、況んや大人君子生を樂しむ之心を懷き、矜恕（哀憐に恕）之德を流し、法は用いざる可からざるを行い、刑は自ら犯す之罪に加わり、之を爵し而して私に非ず、之を誅し而して怒らず、天下の服せざる者有る乎！」

蜀 **〔諸葛亮の廟を立てる〕** **蜀**（司馬光は漢とすべきを變更せず）人は所在に**諸葛亮**の為に廟を立てんと求め、漢主は聽さず。百姓は遂に時節に因りて私に之を道陌の上に祭る、歩兵校尉の**習隆**等は上言す、

「請う其の墓の近くに、一廟を沔陽に立て、其の私に祀るを斷つべし。」

漢主は之に従う。

蜀 **〔蔣琬は衆望を得る〕** 漢主は左將軍の**吳懿**を以て車騎將軍と為し、節を假し、漢中を督さしむ。丞相の長史の**蔣琬**を以て尚書令と為し、國事を總統し、尋いで**琬**に行都護を加え、節を假し、益州刺史を領せしむ。時に新たに元帥を喪^{うしな}い、遠近は危ぶみ慄^{おそ}れ、**琬**は類（同輩）を出て萃（群衆）を拔し、群僚之右に處り、既に威容（憂える貌）無く、又た喜色無く、神守舉止は、平日の如く有り、是に由りて衆望は漸く服す。

吳 **〔東西守りを増すを当然と宗預は主張〕** 吳人は**諸葛亮**の卒するを聞き、魏が衰えを承けて蜀（司馬光は漢とすべきを変更せず）を取るを恐れ、巴丘（湖南省武陵道岳陽縣の西南、現・岳陽市岳陽縣）の守兵萬人を増し、一は以て救援と為さんと欲し、二は以て分割を事とせんと欲す。漢人は之を聞き、亦た永安（四川省東川道奉節縣、現・重慶市奉節縣）之守りを増し以て非常を防ぐ。**漢主**は右中郎將の**宗預**をして吳に使いせ使め、吳主は問いて曰く、

「東と西とは、譬えば猶ほ一家のごとし、而るに西は更に白帝（永安の東）之守りを増すと聞くは、何ぞ也？」
對えて曰く、

「臣は以為うに東は巴丘之戍りを益し、西は白帝之守りを増すは、皆な事勢は宜しく然るべし、俱に以て相い問うに足らざる也。」

吳主は大いに笑い、其の抗盡（吳に屈せず抗議を盡す）を嘉し、之に禮すること**鄧芝**（劉備志後に諸葛亮が送った使者）に亞す。

吳 **〔諸葛恪は丹楊経営に行く〕** 吳の**諸葛恪**は以えらく、

「丹楊は山險しく、民は果勁多し、前に兵を發す（陸遜は先に嘗て山越を部伍し兵と為す、68 卷漢獻帝 28 年にあり）と雖も、徒だ外縣の平民を得て而して已む。其の餘は深遠にして、能く擒え盡くす莫し」

と、屢々自ら官の為に之を出さんを求め、

「三年にして甲士四萬を得る可し。」

衆議は咸な以為く、

「丹陽の地勢は險阻にして、吳郡、會稽、新都、鄱陽の四郡と鄰接し、周旋は數十里、山谷は萬重なり。其の幽邃の民人（続は人民）は、未だ嘗て城邑に入り、長吏に對せず、皆な兵に仗りて野逸（野外に奔逸す）し、林莽に白首（白髪、年を取る）となる。逋亡の宿惡は、咸な共に逃竄す。山は銅鐵を出だし、自ら甲兵を鑄る。俗は武を好み戦いを習い、氣力を高尚にする。其の山に升起險に赴（続は越）き、叢棘を抵突し、魚之淵に走り、猿、狢（猿の屬、黒猿）之木に騰^{のぼ}るが若き也。時に間隙を見、出でて寇盜と為り、兵を致して征伐し、其の窟藏を尋ねる毎に、其の戦いは則ち蜂のごとく至り、敗れば則ち鳥のごとく竄れる、前世より以來、羈する能わざる也。」

皆な以て難きと為す。**恪**の父の**瑾**は之を聞き、（4-304p）亦た以えらく事は終に逮^{およ}ばず、嘆じて曰く、
「**恪**は大いに吾が家を興さず、將に吾か族を赤（滅ぼす）せんとする也！」

恪は盛んに其の必捷を陳べ、**吳主**は乃ち**恪**を拜して撫越將軍（山越を招撫する將軍）と為し、丹陽太守を領せしめ、其の策を行わ使む。

■冬，十一月，洛陽は地震す。

呉の潘濬は武陵蠻を討つこと（太和五年、231年に派遣），數年にして，斬獲は數萬なり。是より群蠻は衰弱し，一方寧靜なり。十一月，濬は武昌に還る。

令和4年6月4日 翻訳開始 13001文字

令和4年6月16日 翻訳終了 28058文字